



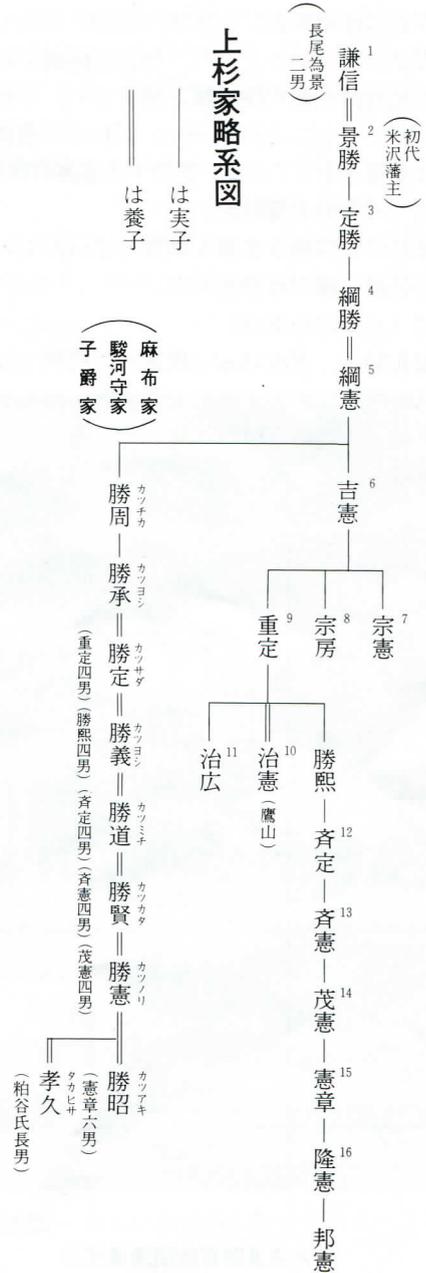
米沢市文化財年報 No.4

米沢市教育委員会



花籠図(軸) 上杉勝賢(息廬)筆

上杉家略系図



大浦 B 遺跡

調査期間：平成2年4月12日～4月20日

7月18日～7月23日

9月4日～10月31日

平成元年度に、店舗新築工事に伴う緊急発掘調査により、奈良・平安期の官衙跡とみられる建物跡が確認された。この遺跡の保存を前提に、国の補助を受け今年度から3ヵ年にわたり周辺部の確認調査を進めることになった。

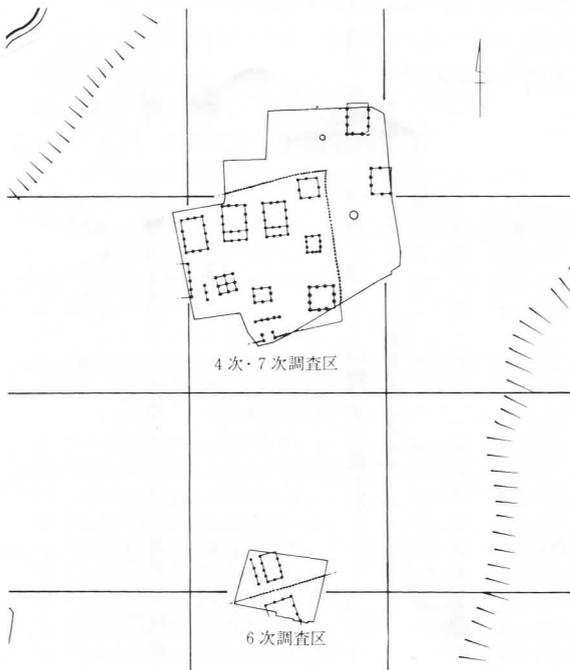
調査は昨年調査した区域の北側と東側を拡張する方法で実施したところ、杭列で区画された外側にも建物跡や竪穴住居跡が発見され、予想以上に広がっていることが判った。これらの遺構は年代的な変遷を示しており、要約すれば次のようになる。

I期〔八世期中葉以前〕

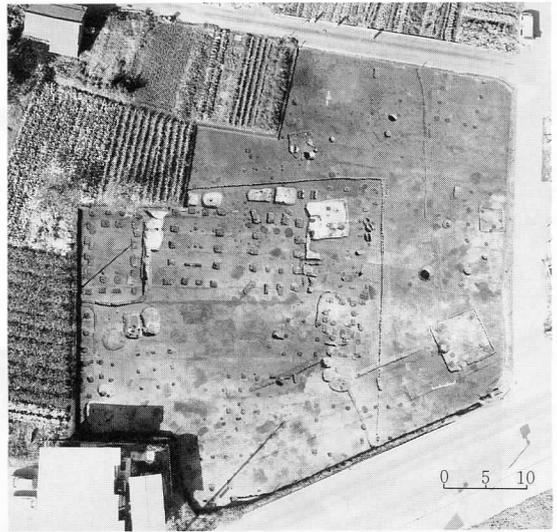
最初に大規模な集落を構成していたもので、竪穴住居跡4棟が確認された。

II期〔八世紀中葉頃〕

南北39m、東西46m（推定）の杭列で区画された区域内に3間×4間の大型建物3棟を中心に倉庫4棟、小規模な建物3棟、門1棟の11棟で構成されている。



大浦遺跡官衙関連遺構図



大浦B遺跡遺構全景

III期〔八世紀末葉〕

基本的にはII期の建物の建て替えにより構成されたものであるが、杭列外にも新たな建物跡も存在しており、施設が拡大したものと考えられる。IV期は九世紀初頭、V期は13世紀以降の集落で、IV期はIII期の施設としての機能が失われた直後の時期、V期は中世に入ってからの集落跡の一部と考えられる。

以上のことから大浦B遺跡をみれば、I期の段階で、官衙（郡衙）建設に伴う大浦集落の強制移転があり、II期の官衙施設が構築されたものと考えられる。III期に入り、周辺施設の整備が急速に進み、大浦Aや大浦C遺跡を含めた範囲内にも関連施設の建物群が配置されてくる。そしてIV期の平安初期には官衙は廃絶（別の場所に移転）されていったとみられる。IV期の建物はかつての官衙施設に附属した形で残っており、そこには残務処理を行ったと推測される焼土を有する土壇も多数検出され、その中の一つに延暦23年（804）の漆紙文書も出土している。この漆紙文書は国立歴史民俗博物館の平川南教授の鑑定により、延暦23年の12月18日から28日を記した具注暦であることが判明している。本遺跡は今後の詳細調査を待たなければならないが、奈良時代の置賜郡衙の可能性が高いものとみられる。

大浦 C 遺跡

調査期間：平成2年4月20日～5月31日

平成2年7月12日～9月5日

本遺跡が所在する本市芦付及び大浦地区は、南を堀立川、中央を松川（最上川）、東を羽黒川の3河川によって形成された河岸段丘にあり、大浦A～Dの4遺跡で構成された大浦遺跡群の中に含まれている。

本遺跡は過去2度にわたって調査されているが、昭和59年の調査においては、奈良時代中葉から後半にかけての溝跡より木簡、布目瓦が発見され、昨年の調査では中世から近世にかけての遺構が確認されている。

今回の調査は個人の圃場整備に伴い緊急に発掘調査するものだが、調査は2ヶ年にわたって行うものとし、本年は北半分にあたる約1,200㎡について調査を実施した。

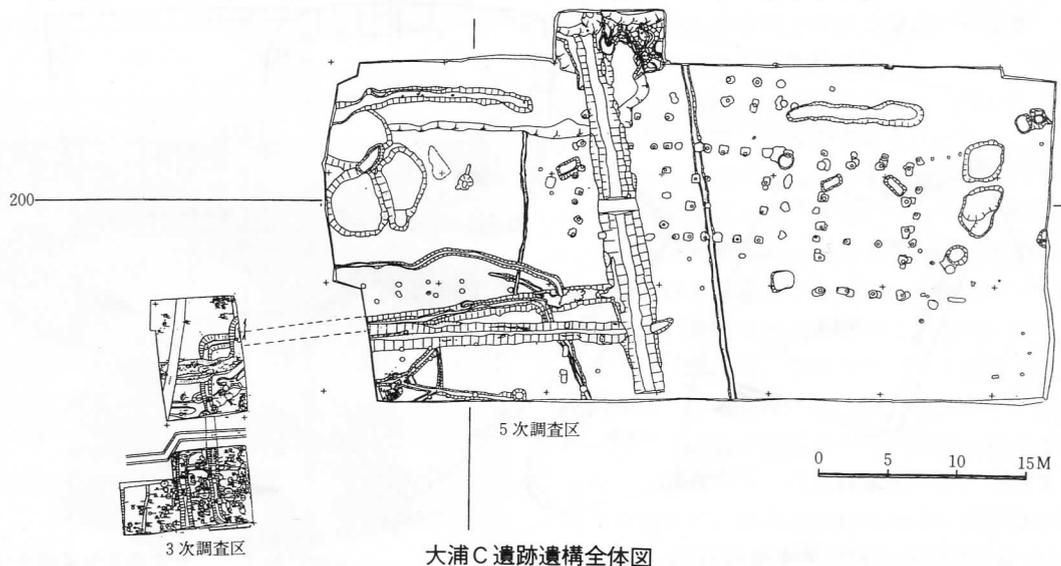
調査結果の概要は、遺構としては、奈良期に属するもの21基、中世期に属するもの14基、近・現代期に属するもの5基の計40基が認められている。その中でも調査区のはほぼ中央に沿って認められた奈良期の8棟の掘立建物跡は、柱穴の切り合い関係から新旧Ⅱ期に区分され、主軸方位は $N-4^{\circ}-E$ とほぼ真北を示している。Ⅰ期は東西長を基本とする 4×3 間の建物2棟と柱列で構成され、Ⅱ期になると建物の主軸長が南北方向となり、 4×3 間の建物2棟、 3×2 間1棟、 4×2 間と 2 間 $\times 2$ 間(?)の倉庫各1棟の5棟となっている。



大浦C遺跡遺構全景

遺物としては、整理箱にして15箱出土し、奈良時代の遺物としては、内黒土師器杯、須恵器杯、須恵器蓋、土師器甕、布目瓦等があり、主に溝や土壙を中心に検出されている。また中世期の遺物としては、調査区を東西に二分するように伸びた大型の溝から検出された木製品が中心で、漆器椀、木篋、下駄等の他に土鍋、陶磁器類、種子や昆虫遺体等の自然遺物を検出している。

今回の調査で確認された奈良期の建物跡8棟は、主軸方位がほぼ真北に近く、2期に亘る遺構の変容も郡衙跡と推測される隣接の大浦B遺跡と共通していることから考えれば、郡衙に密接な係りを有する外部施設とみられる。大浦A遺跡からも郡衙施設と考えられる杭列跡が発見されており、予想以上の広い範囲で官衙域が構成されていたものと言えそうである。来年度に行う南半分の調査によって、これらの関係がさらに明確になると思われ期待される場所である。



一ノ坂遺跡

調査期間：平成2年4月9日～11日
平成2年5月31日～6月14日
平成2年11月1日～12月21日

平成元年度に、住宅新築に伴う緊急発掘調査により国内最長の大型住居跡が確認された。このため、今年度から文化庁の補助を受け、その周辺部の調査を進めることとなった。

4月～6月の期間は第3次調査として、11月から12月の期間は第4次調査として発掘調査を実施した。3次調査は宅地造成に関連する調査であり、トレンチ調査であった。段丘から低地の広い範囲に幅3m、長さ53mを配して行われた。その結果、一ノ坂遺跡の周辺における河岸段丘の形成過程が明らかになった。また大型住居跡が位置する二段目河岸段丘と最上部の河岸段丘を結ぶ斜面から3基のフラスコ状の土壇が発見された。土壇群の覆土は人工堆積であり、覆土からは管玉・石鏃・土器が出土した。さらに底面には河原石がそれぞれ1個ずつ配してあった。

これらの状況から、この3基の土壇は「墓」と考えられ、管玉は副葬品と思われる。このように段丘斜面には土壇群が配置されていると想定される。

管玉は合計9点出土しており、最大のもは長さ1cm位ある。滑石質の石材を使用している。

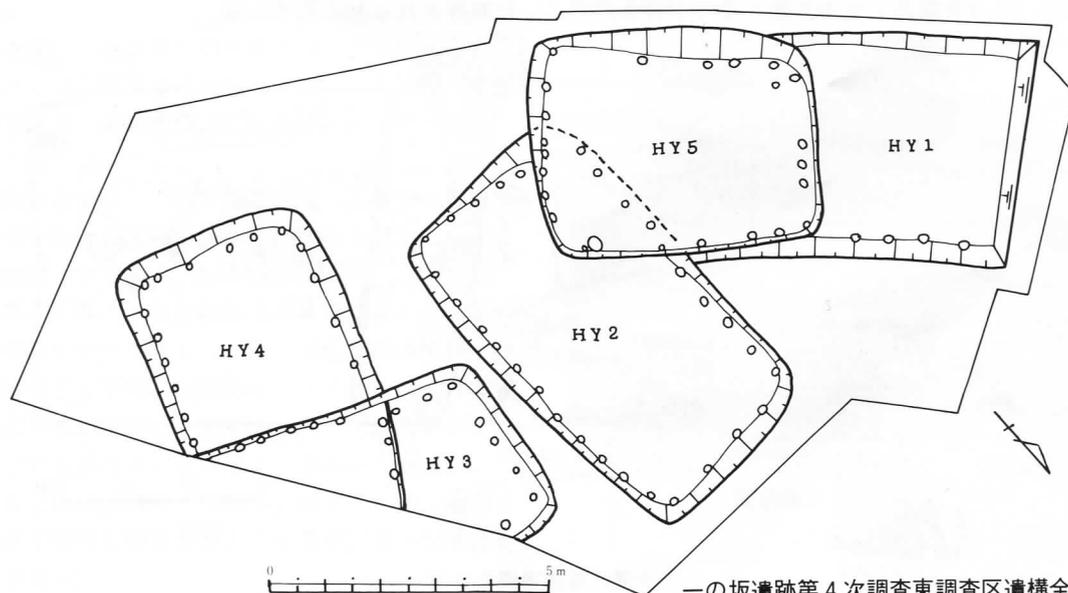
第4次調査は、南と北、それに東の3調査区を設定して、遺跡の分布状況調査を実施した。



一ノ坂遺跡第4次調査東調査区全景

その結果、北区、南区の調査箇所からは遺構が検出されなかった。特に南区からは遺物がほとんど検出されなかった。なお、この南区は最上部の段丘である。東区からは写真と図のような竪穴住居跡5棟が確認された。いずれも長方形を示し、壁は直角に掘り込まれている。深さは40～60cmと深い。覆土からは大型住居跡のようなチップや炭化物は検出されなかった。時期は縄文時代前期とみられ、大型住居跡との関連性が注目される。土器、石器は約2,000点出土しており、その中には関東地方から搬入したとみられる土器が認められた。

写真には床面に埋設された土器がみられるが、これは縄文後期に位置する土器であり、竪穴住居跡に関連するものではない。



一ノ坂遺跡第4次調査東調査区遺構全体図

指定文化財紹介

— 国 指 定 —

あさぎじ かようもんどん すどうふく 〈浅葱地花葉文緞子胴服〉

指定年月日：平成2年6月29日

指定の種類：重要文化財（工芸品）

指定物件名：浅葱地花葉文緞子胴服 一領

指定物件の所在：米沢市丸の内1-4-13

上杉神社

指定物件の概要

〈製作年代〉 桃山時代

〈身丈〉 98.0cm

上杉景勝（1555～1623）の家老直江兼続（1560～1619）の所用と伝えられる胴服である。

胴服は小袖の上に着る最上層衣である。同じく小袖の上に着る直垂ひたれのように公的なものではなく後の羽織のような形式的な固苦しさもない。私服としての自由さを持った、当時としては最先端の洒落着しゅれぎであったという。

上杉謙信所用と伝えられる胴服が小袖こそでに近いのに対し、この胴服は羽織に近い形で、衿がなく襟が前身頃の裾までついている。身頃の広さに対し袖幅の狭い形状は桃山時代の特色を示している。

表の生地は十六世紀のイタリア・スペイン方面の製と見られる緞子どんすで、組紐風の曲線格子に花葉文を組み合わせた文様である。当時の交易によってもたらされた舶来の生地をわが国で胴服に仕立てた貴重なもので、何とも美しい。



— 県 指 定 —

せんげんじもくぞうせいしぼさつぎぞう 〈千眼寺木造勢至菩薩坐像〉



指定年月日：平成2年6月29日

指定の種類：有形文化財（彫刻）

指定物件名：木造勢至菩薩坐像 一軀

指定物件の所在：米沢市窪田町窪田1861

曹洞宗普光山千眼寺

指定物件の概要

〈製作年代〉 平安時代後期（12世紀）

〈材質・構造〉 木造、漆箔、彫眼、白毫水晶、割矧造り

〈法量〉 像高87.6cm 肩はり37.2cm
膝はり66.0cm

等身大の像である。表面だけでなく、像内の内削り面にも首から金箔を押し、さらに漆を塗っている。この入念な仕上げは、像内に月輪等を納入するための処置といわれている。

同様の処置は、院政期の中央作に例があるものの、県内では唯一のものである。

鎌倉時代以前に遡る仏像彫刻で、等身以上の大きさで、本像ほど保存状態のよい例はまれである。

千眼寺は、米沢藩侍組色部氏の菩提寺である。色部氏は鎌倉幕府より地頭職を任命された家柄であったが、長尾景虎（のちの上杉謙信）の時にその勢力下に属した。千眼寺は、天文元年（1532）色部長真の開基で越後岩船郡に建立され、慶長6年（1601）上杉景勝の米沢移封に従い現在地に移った。千眼寺のある窪田村家中には、明治まで千眼寺のほか、浄土宗の阿弥陀寺、真言宗の青龍寺があり、勢至菩薩坐像は阿弥陀寺の旧蔵である。

— 県 指 定 —

せんげんじもくぞうあみだによらいつぞう
〈千眼寺木造阿弥陀如来立像〉



指定年月日：平成2年6月29日
指定の種類：有形文化財（彫刻）
指定物件名：木造阿弥陀如来立像 一軀
指定物件の所在：米沢市窪田町窪田1861
曹洞宗普光山千眼寺

指定物件の概要

〈製作年代〉 鎌倉時代後期(13世紀後半)
〈材質・構造〉 木造、金泥、玉眼、螺髪植付、肉髻珠欠失、白毫水晶(後補)、寄木造り
〈法 量〉 像高99.6cm 肩はり25.3cm
裾はり20.8cm

本像は、両足裏に柄を設けなくて仏足文をあらわすという特異な技法を示すが、これは、説法を表現する「齒吹きの弥陀」と呼ばれる形式の像に多くみうけられる。

肉髻の盛り上がりが極端に低いことから見て、鎌倉中期から後期にかけての作品と思われるが、技法は入念であり、極めて高い水準を示している。

たとえば、螺髪を刻出するのではなく、別製のものを一つ一つ植えつけている点、襟元にたるみを持たせて写実的な変化をつけている点、背面の衲衣の襷の刻出も、全く手を抜かずに巧みにまとめられている点などにそれがよく表われている。

もとは同地域の「青龍寺」にあったが、廃寺となり千眼寺に移されたこととされるが、その伝来は定かでない。

— 市 指 定 —

ほうりょうづかこふん
〈寶領塚古墳〉

指定年月日：平成3年3月25日
指定の種類：史跡
指定物件名：寶領塚古墳
指定物件の所在：米沢市窪田町窪田字北宝領
863-1他

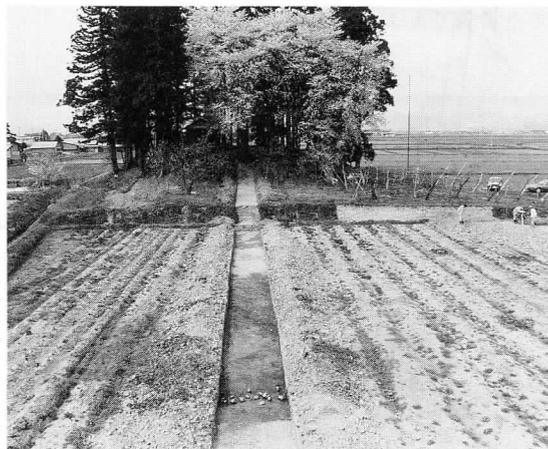
指定の範囲：米沢市窪田町窪田字館式768, 769, 770, 771, 772の一部, 780-3, 780-6, 同町字北宝領862, 863, 863-1

指定の理由：本古墳は全長80mの三段構築の前方後方墳であり、しかも墳丘全体に葺石が張り巡らされている。このことは東日本では初めての発見であり、時期としては、4世紀中葉後半と考えられる。

これまで東北地方で最大とされていた福島県原町市の桜井古墳(全長75m)と川西町の天神森古墳(全長75.58m)よりさらに5m大きい前方後方墳となる。

さらに、前述の葺石が張り巡らされていること、古墳の前方部と後方部の比率が6:6であることから、天神森古墳の6:4.5より古い型式の古墳といえる。

このようなことから、現在確認されている前方後方墳としては、東北最大規模の、県内でも最古の大型古墳であり、米沢盆地の古墳文化の発生、発展の経緯を知る上でも極めて貴重なものといえる。



寶領塚古墳調査現場

山谷コレクション

平成元年7月に山谷文仁氏（仙台市在住）より米沢市に寄贈された昆虫標本（通称山谷コレクション）をもとに、受入時に続いて今年度も昆虫展が開かれた。今年度は、標本の収蔵元である米沢市立上杉博物館で初めて開催されるということもあり、「歴史の語りべたち」というテーマで、7月20日から8月26日の夏休み期間に開かれ、親子づれを中心に5,375人の来館者を集めた。

米沢藩が奨励してきた養蚕などの伝統産業と昆虫の結びつき、芳泉町などかつての武家屋敷の裏に広がる雑木林に生息する昆虫、そして米沢藩の開田事業（堰の開搾）によって分布を広げたいことがわかってきた山形県の天然記念物の蝶・チョウセンアカシジミの3点がサブテーマであったが、前年度子ども達を魅了した「世界の昆虫」も注目を集めた。

山谷コレクションは、氏の勤務地であった米沢や酒田などの山形県、現在の在住地である宮城県それに出生地である青森県など、基調をなす東北各県の標本に加え、オサムシや蝶類など、氏の研究テーマ・収集対象であるグループについては日本全土に及んでいる。

また数回の東南アジアの採集行で氏自らが得られた昆虫を中心に、世界各国の標本が収集されており、広い範囲から地域の昆虫をみつめるという視座での展示が可能である。

寄贈点数は、標本箱（各種仕様）で730箱で推定10万点であり、氏の70年間に及ぶ探索活動の長さや興味対象の広さを反映して、ほとんどの目に及ぶ。

現在、昨年度、市で購入した300箱の標本箱を利用して、整理や展示用標本作成が行われている。

目録については、受入以前からバッタ目やコウチュウ目の一部が専門誌に発表されてきたが、現在は昨年11月に創刊された上杉博物館発行の「ファウナ ウキタム」（ファウナは動物相、ウキタムは日本書紀に登場するアイヌ語？の当地名）誌上で毎月報告されている。現在まで発表されたグループは次のとおり（括弧内は予定）。

コウチュウ目	水生甲虫類	1号	5
	ハンミョウ類	(6号)	—
	テントウムシ科	(7号)	1
アミメカゲロウ目	ウスバカゲロウ科	3号	1
	ラクダムシ科	4号	1
カメムシ目	カメムシ類	4号	5
	アメンボ科	2号	—
シリアゲムシ目	シリアゲムシ科	5号	1
ハエ目	ハナアブ科	4号	20

山谷コレクションの整理は、そのまま地域昆虫目録の作成につながるものといえ、以上のなかに山形県未記録昆虫（右端の数字）だけで34種が含まれている。また、例えばどんなゲンゴロウがいつから米沢でみられなくなったか、といった地域の自然環境の衰亡を示すデータともなっている。

埋蔵文化財のように法的・組織的に保障されていない昆虫の標本収集機能について、社会的認知を高めることも、地域の博物館の今後の課題である。



昆虫展 —歴史の語りべたち— ポスター

平成二年度 米沢市立上杉博物館特別展より

上杉子爵家資料展

— 上杉子爵家について —

米沢新田藩は享保4年(1719)2月に成立した米沢藩の支藩である。米沢藩主上杉吉憲が弟勝周(綱憲5男)に領内で新たに開発した新田の内一万石を分知することが幕府から許されたことによる。上杉宗家に対して支侯と呼ばれた。また代々駿河守を称し、駿府城の加番役を勤めたことから駿河守家とも言う。米沢においては、特に城を持たず、時代により二の丸または三の丸に屋敷があった。江戸屋敷は、享保10年(1725)9月、米沢藩の中屋敷麻布12,800坪の内2,800坪と定められた。二代勝承が勝周の実子である以外、ほとんど宗家より養子に入り、廃藩まで藩主は五代続き、明治17年、六代勝賢は華族に列し子爵を授けられた。上杉宗家は伯爵である。

形式的には独立した藩として米沢藩の支藩の形をとっているが、領地や家臣団を持たず、米沢藩の支配・財政機構の中で運営された。家臣名簿にあたる上杉宗家の分限帳の筆頭に「駿河守一万石」と記されている。

上杉家は外様大名であり、宗家綱勝の突然の死による御家断絶の危機があった。結局綱勝の甥綱憲を藩主に迎え所領半減の十五万石で存続したが、子爵家の創設には、宗家に万一の場合の含みがあったと考えられる。

子爵家初代勝周は、若くして藩主となった兄吉憲の遺子、宗憲・宗房・重定を補佐し、二代勝承は、上杉鷹山とともに儉約誓紙を白子神社に奉納するなど、その治政に理解を示した。また幕末の藩主勝道は、戊辰の役において米沢藩主齊憲に従い、その謝罪のために奔走した。

子爵家関係資料は、古文書を中心に子爵家現当主上杉孝久氏より米沢市に寄贈されたもので、平成2年度はその一部をはじめて公開したものである。

報告書紹介

米沢市教育委員会では、埋蔵文化財及び一般文化財を年次毎に調査し、報告書を作成しておりますので紹介します。

〈埋蔵文化財調査報告書〉

- 『普門院遺跡外3遺跡発掘調査概報』 第1集 在庫なし
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅰ』 第2集 在庫なし
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅱ』 第3集 在庫なし
- 『八幡原遺跡調査報告書Ⅲ』 第4集 在庫なし
- 『比丘尼平遺跡調査報告書』 概報 第5集 在庫なし
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 第6集 ￥4,000
(水神前・柿の木・ニタ俣B各遺跡)
- 『笹原遺跡発掘調査報告書』 第7集 在庫なし
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 第8集 ￥4,950
(八幡堂・ニタ俣A各遺跡)
- 『戸塚山第137号墳発掘調査報告書』 第9集 ￥2,000
- 『戸塚山古墳群詳細分布調査報告書』 第10集 在庫なし
- 『左沢遺跡発掘調査報告書』 第11集 ￥1,500
- 『法将寺遺跡発掘調査報告書』 第12集 ￥1,040
- 『白旗遺跡発掘調査報告書』 第13集 ￥500
- 『上浅川遺跡発掘調査報告書 第1・2次』 第14集 在庫なし
- 『上浅川遺跡発掘調査報告書 第3次』 第15集 ￥6,000
- 『石垣町遺跡発掘調査報告書』 第16集 ￥800
- 『桑山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 第17集 ￥3,700
(大清水遺跡)
- 『大浦A・C遺跡発掘調査報告書』 第18集 ￥1,900
- 『三の丸・生蓮寺遺跡発掘調査報告書』 第19集 ￥1,170

- 『木和田館跡第1次発掘調査報告書』 第20集 ￥400
- 『比丘尼平遺跡発掘調査報告書』 第21集 ￥950
- 『矢子大日向遺跡発掘調査報告書』 第22集 在庫なし
- 『遺跡詳細分布調査報告書』 第1集 第23集 ￥2,200
- 『穴籬C遺跡第1次発掘調査報告書』 第24集 在庫なし
- 『遺跡詳細分布調査報告書』 第2集 第25集 ￥1,700
- 『覚範寺第1次・第2次発掘調査報告書』 第26集 ￥1,510
- 『遺跡詳細分布調査報告書』 第3集 第27集 ￥510

〈一般文化財調査報告書〉

- 『米沢の民家』 第1集 在庫なし
- 『米沢の仏像』 第2集 ￥1,370
- 『米沢の神社・小祠・石造物』 第3集 ￥1,930

表紙の土偶について

この土偶は、米沢市八幡原No.30遺跡より出土したもので、縄文後期(約3800年前)のものです。

顔と腕の部分がこわれていますが、ふくよかな胸乳や腹部は女性をあらわしています。

県内には縄文時代の土偶がたくさん出土していますがこの時期のは少なく、縄文後期を代表するものといつてよいでしょう。

昭和56年12月17日米沢市指定文化財となる。

発行 米沢市教育委員会
〒992 米沢市金池五丁目2-25
(担当 文化課文化財係)
TEL 0238-22-5111